音 、 名付け 、 〈背景〉

～Eric Dolphy, Thelonious Monk, Charles Mingus, Max Roach, Duke Ellington, Roland Kirk 。たちの音楽～

橋本 雄一（中国文学、植民地社会思想 を聴き調べ学んでいます）

――― “ Bite your lip and take a trip ”　Curtis Mayfield

Ⅰ　音

冒頭一音で飛び出す宇宙空間　　尖鋭化し、入り組んだユーモア

それ以前よりも小規模に濃密に個人のように楽隊を造営

個々のメンバーの演奏即興を重視、かつ全員が一体となって驀進・前進

聴衆も、その音を芸術と社会として＜聴く＞空間になっていく

その「モダン・ジャズ」における新しさと、しかも従来からの他フィールドの個々の黒人ブルーズ音楽家による音・様式との結びつき

＜複数＞楽器への地平展開　：ひとりの人間が自分のうちに抱擁する複数の＜生命＞のように、数種類の楽器を一人が鍛え、行なう。また、たとえ一つの楽器であっても ＜＜＜ 複数 ＞＞＞

身体＜すべて＞を使用することにより　： 例えば Eric Dolphy や Rahsaan Roland Kirk たち

Ⅱ　名付け

Eric Dolphy (alto sax, bass clarinet, flute, clarinet, piccolo、、、作曲家・編曲家)

マルティ文法、変移イディオムの、複数楽器の完璧なコントロール者

深き紺色の自然界による、動物たちによる<<< 声 >>>　を聴く人

<<Outward Bound>>	:	録音＆発売 1960	New Jazz	＊アルバム・ジャケットの絵画
“Out There”	: << Out There >>	録音 1960、発売 1961	New Jazz	＊アルバム・ジャケットの絵画
“Far Cry”	: << Far Cry >>	録音 1960、発売 1962	New Jazz	
“Out to Lunch”	: << Out to Lunch! >>	録音&発売 1964	Blue Note	
“Jim Crow”	: << Other Aspects >>	録音 1960～62　発売 1987	Blue Note	

＊この曲の録音は 1964 との新たな資料もあり

☆　例えば、Sly And The Family Stone の歌曲たちにも更に尖鋭なこのような名付けの作法： 1969

☆　Malcom X　　Muhammad Ali

Thelonious Monk (piano、作曲家、コンボ・リーダー)

～ ＜ひとつ＞ のクリア、粒立ち、ピュア、尖鋭　：鍵盤を一回押すときの技術

～１曲における回廊をめぐる美がなす迷宮の反復

～ その多くの曲が多様な音楽家に演奏され、特にフリー系の演奏家に敬愛される

・謎なる＜名付け＞　＝＝＝ロマン性を廃し、抽象名詞によるタイトル曲多し＝＝＝その彼の意図

＝＝＝「現実」への違和感？？？　＝＝＝醒めた批評と遊びと闘争

“Bemsha Swing”　: << Brilliant Corners >>　1956　Riversde

“Misterioso”　　*：彼の多言語性*

“Epistrophy”

“Functional”　　: << Thelonious Himself >>　1957　Riveside

、、、、　、、、、　、、、、

・Blues 楽曲と＜色彩＞と＜自分＞、という主題

“Light Blue”　　: << Thelonious in Action >>　1958　Riverside

"Blue Monk"、、、、、
・＜他＞へ、＜多＞へ、複数へ回帰　＝叙情＋ユーモアへの答えは、「言語」の無い曲にこそ
"Ask Me Now"
"I Mean You"

III　北米（の歴史）という＜背景＞ゆえの、北米から欧州へ移動・移住、あるいは往来
Eric Dolphy による ＜外＞ の方角への望見、渡海、彷徨
（彼に限りませんが）度々の欧州演奏会、北欧、最後のオランダ・パリ録音、ベルリンにて客死
上記 *"Jim Crow"* は、この最後のヨーロッパへ活動移転の直前に演奏・録音したとの資料あり
このあとの渡欧、オランダで Thelonious の曲 *"Epistrophy"* を鋭角音にて録音、
最期録音のパリにて長篇新曲 *"Springtime"* 演奏
☆「Thelonious に誘われれば、ぜひ一緒に演奏したい。でも私にはまだそこまでの技術が無い。
彼と音を共にするには、私はまだまだ練習しなくてはならないのです」（橋本グマ要約）

☆さらに例えば、
Horace Parlan (piano)　　の北欧移住
Dexter Gordon (tenor sax) の往来

IV　黒人ミュージシャン＜ひとり＞の内なる高き蒼き＜複数＞、ミュージシャンどうしの相互の高き蒼き＜複数＞
Thelonious　の回想：「自分の側」の大人から言われた「イメージ」をいつも＜裏切る＞、身近の白人
Charles Mingus (bass、コンボ・リーダー）：　美しく尖鋭・重厚な、複雑に湾曲した＜対他＞的＜心＞と主張曲
：　黒人被害事件をめぐって、尖鋭と風刺と寓話化の批評創作
：　自分の音が "Jazz" と呼ばれることを日ごろ嫌い、「＜音楽＞と呼べ」と。
Max Roach (drums)　の行動：　黒人が受ける社会問題に距離感の分からぬ "Jazz" イヴェントへの抗議デモ
：　1961 年、Miles Davis のカーネギー・ホールにおけるコンサートの演奏ステージに上がって抗議、
"Freedom Now" とアピール（『油井正一のジャズ名盤物語』、共同通信社、1990 年）
☆盟友 Clifford Brown(trumpet)にかんする言葉：「彼は自分を含む黒人ミュージシャンの待遇に不安だった。しかも正しい報酬を得ないままに彼は逝ってしまった」（同上書を参照して、橋本グマ要約）
"George's Dilemma"：<< Study In Brown >>　by　Clifford Brown & Max Roach Quintet、録音＆発売 1955 EmArcy

V　自分のなかの＜他＞、複数、＜多＞　＝＝＝ "Modern" 手前からの一貫した闘いかた
Duke Ellington (piano、作曲家、オーケストラ・リーダー)の曲の名前と構成に在る＜色彩＞たちの力
"Black, Brown And Beige"、*"Black And Tan Fantasy"*、*"Mood Indigo"*、、、、、

X　一人の人間は一つの「色彩」だけではない。
＜一つ＞を大切にしながら、＜一つ＞ではいられない。のではないのか？！！
Rahsaan Roland Kirk（tenor sax, manzello, stritch, siren, nose flue 、、、、、、）　という高き蒼き音色と色彩と身体
"The Black And Crazy Blues"　：<< The Inflated Tear >>　録音 1967、発売 1968　Atlantic
＊このアルバムには Duke Ellington の曲 *"Creole Love Call"* あり
黒人であり、かつその範疇を超え出て、視覚障害者という＜彼自身＞の闘争 と 普遍のブリリアントな音
複数の楽器と身体と音色で主張する
"Volunteered Slavery"　：<< Volunteered Slavery >>　録音 1969 Atlantic
北欧コペンハーゲンにおける、ブルーズ・マスターたる Sonny Boy Williamson II (harmonica) と共演

再び
I　*"善哉，善哉，子之聽。夫志想象猶吾心也。吾於何逃聲哉？"*（《列子》 湯問篇 十二）